

## ワイルドの母 スペランツァの結婚

貝 嶋 崇

スペランツァは結婚においても謎の多い人物である。結婚の前の状況や結婚式の日付など、簡単な事実関係もはっきりとはしていないのである。まず、ウイリアム・ワイルドと結婚した日ははっきりしていない。ホレス・ウィンダム（一九五二）は、一八五一年一月二日、聖ピーター教会でジョン・ワイルド神父のもとで行われたと述べているが、その後の研究者テレンス・ド・ベール・ホワイト（一九六七）は、こう述べている。

ウイリアム・ワイルドとジェーンの結婚の事情に関してはあまりわかっていない。結婚式は一八五一年の一月一二日ダブリンの聖ピーター教会で行われた。花婿はウエストランド街二一番地にすむアイルランドの外科のドクターである。<sup>(1)</sup>

また、ワイルドの伝記で名高いリチャード・エルマン（一九八七）は、こう書いている。

ウイリアム・ワイルドはジェーン・エルジーと一八五一年一月一四日に結婚した。花婿は彼女の尊敬に値する人物だった。彼女は、雑誌『ネーション』の中で、尊敬を込めて彼の書いた『ポイン川の名勝』を書評したが、そのことが二人の初めての出会いのきっかけとなったのだろう。<sup>(2)</sup>

こうして、二人の結婚したといわれる日付だけでも、二一日から、一二日それから、一四日とそれぞれ三つの伝記にそれぞれ違った三つの日付がある。もちろん真実は一つのはずである。結婚をした日の特定が、待たれたのである。そして最近になって、ウィリアム・ワイルドとその母スベランツァの関係を本格的に研究した研究書が出版された。それが *The Importance of Being Paradox: Maternal Presence in the Works of Oscar Wilde* と云う本である。これは主に、オスカー・ワイルドの作品の中で、母親ジェーンの存在がいかなるものかを論じたすばらしい研究書であるが、その中の「ジェーンとオスカーの伝記」の章で、パトリック・ホラン（一九九七）は、ジェーンの結婚について述べている。しかし、残念ながら、ホランは二人の結婚について、一八五一年と漠然と年だけを述べるのとどめて、その日付に関してはいっさい触れていない。これは、先の研究書がそれぞれ異なった結婚式の日取りをあげていることが主な原因だと思われる。

もちろん、ここでは、真相を突き止める資料がないのではつきりしたことが言えないけれども、日時と場所を最初に特定していることから、また、その日の事情を詳しく書いていることから、ある程度ウインダム（一九五一）の一月二一日に結婚式を挙げたという説を信用することにする。ウインダムは結婚式の詳細についてこう述べている。

文学に対する共通の趣味はともかく、二人はその他の趣味にも互いに興味を持つようになった。一八五一年の冬、ウィリアムが三六歳、エルジー二五歳で、二人は結婚した。式は、一月二一日に花婿の親類のジョン・ワイルド牧師の介添えて聖ピーター教会で、行われた。ウィリアムの同僚達はステイブン病院から祝福に駆けつけていたが、花嫁側の家族の参列はなかった。その欠席の理由は、親戚の誰もが、ダブリンから

離れたところにいて、冬の道は交通には大変だったからだと思われる。<sup>(3)</sup>

ここでは、新婦の親戚が一人も参加しなかったことと、その不参加の理由が交通事情にあったことが述べられている。しかし、メルヴェイル (1884) は、スペランツァの叔父のジョン・エルジーが式に参列していたと述べている。<sup>(4)</sup> その上、スペランツァ側の出席者が少なかった理由を、スペランツァの母の喪が明けていないためと記している。この食い違いに関しては、そこに出席したとされるジョンからスペランツァの姉のエミリー宛に書いた手紙が紹介されているので、その内容から、ジョンが出席していたことがわかる。しかし、母親の喪が明けていないということに関しては、スペランツァの母の生没年がはっきりとはしていないことから、今後の研究に待つ他はない。また、その手紙から、姉のエミリーは妹のスペランツァの結婚に関しては、あまり乗り気ではなかったことがわかる。ジョンは、結婚した二人と喧嘩しないでくれと頼んでいる。従って、この結婚に周りのものが全て賛成だったというわけではなかった。

周囲から祝福されての結婚するのと、周囲の反対を押し切って結婚するのでは、それから新婚生活を始める二人にとっては大きな違いであったろう。それにしても、それほど二人を結びつけたものは何だったのか。それは、すこしばかり、花婿のウィリアムの話をしてからすることにしよう。

花婿 ウィリアム

ウィリアム・レイフ・ワイルドは、一八一五年の三月に、父トマス・ウィルズ・ワイルドと母エミリー・フィン

の間に五番目の三男として生まれた。ウイリアムは私生児であるという噂があったが、それは根拠のないものである。こうした噂は、ウイリアムのその後の彼の行動を説明するのに役立つものかもしれないが、その根拠は名前からきたものであり、まったく事実誤認といわざるを得ない。ウイリアムは、エルフィン小学校へ進むが、その当時の成績の記録は残っていない。彼の記録については、今のところ、Irish Popular Superstitions という本の中で幼年期のことについて自ら語っているものがあるだけだ。それによると、彼は幼い頃からアイルランドの伝説や妖精、それから超自然の存在にとっても興味があったことが述べられている。彼自身田舎で、農夫からそうした話を聞かされたのであろう。勿論そこで、アイルランドの貧しい人々の苦労話もあったであろう。特に飢饉の時の想像を超えた悲惨な話は、幼いウイリアムの胸にどれほど深く響いたであろうか。また、彼が幼年期に経験したアイルランド人同士の殺戮は、現実からの逃避へと彼を駆り立てたのかもしれない。

一八三二年、ウイリアムはダブリンのスチーブンス病院で外科を勉強し始めた。当時は、ペストが流行していて、ウイリアムの家族は彼がコングへ行くのをくい止めようとした。しかし、ウイリアムがバリマギボンに滞在していたとき、キルマインの行商人の看護を頼まれることで、ペスト騒動に巻き込まれることになった。その男はペストにかかっており、その領主も同じ病気にかかっていた。誰もその屋敷には近寄らなかつた。しかし、ウイリアムはその男が死ぬまでつききりで看護し、その男の死後、遺体を棺に入れて墓地へと運んだ。それから、すぐに屋敷へ戻ると、今度はペストに汚染されていると見なされるものを全て燃やしつつした。そのために、その地区では、ペストの被害はそれ以上広まらなかつたと言われている。こうした勇気のある行為で、ウイリアムは一躍名をあげた。一八三七年の三月一六日に、ウイリアムは王立外科病院から開業有資格を与えられた。

一八三七年の春に、ウイリアムは健康を損なう。また、私生児をもうけている。その後療養のためもあってヨットでの船旅にでる。スペインのラコルニャやリスボンでウイリアムはこの世の春を謳歌する。その後、ジブラルタル、アルジェリア、アレクサンドリア、カイロなどを巡る。エジプトでは眼炎の患者が多いことを知り、その原因が彼らが顔を洗わないことからくることを突き止めた。また、カイロのそばのサカーラの町でミイラを発見した。ミイラの骨の奇形に気づき、すぐにそれを研究資料として自分の研究室へ送った。このように、好奇心と探求心とともに満たしながらウイリアムの旅は続いた。この旅を通して、ウイリアムは眼科への興味を覚えるとともに、考古学に対する熱意も生まれた。

旅行から戻ると、ウイリアムは旅行記を書き始める。これは、その後ロイヤル・アイリッシュ・アカデミー、ヤプリティッシュ・アソシエーションなどでの講演で利用されることになる。その中には、鯨がどのようにして子供に乳を与えるかとか、クレオパトラの尖塔の移築といった人々が興味を持つような話題がみられる。

さらに、ウイリアムはアイルランドの湖を調査し、その遺跡から古代の骨について調査した。そうした研究成果を認められて、一八三九年にアイルランド・ロイヤル・アカデミーの会員に推挙される。その年は彼の旅行記も出版されて、二五〇ポンドを手にした。

一八四一年に、ウイリアムは国勢調査の長官 (Census Commisioner) に任命される。この仕事で、彼は非常に膨大な量の資料収集をした。そして、ほとんどマニアックと言っていくくらいにその仕事に没頭する。病気の患者の診断書を収集し整理し、それをきちんと分類し統計を取るのである。コンピュータの発達した今日では、簡単な処理だといえるかもしれないが、当時としては非常に労力の要求される大変な仕事だった。

その後、父が亡くなりウイリアムは母と姉を引き取りウエストランド街十番地で一緒に暮らす。ウイーンなどで

学んだ医学の腕をさらに磨くために、ウィリアムはそこで開業する。一八四四年の三月までに、およそ二千人の患者を診たといわれている。

こうした業績が評価されて、一八四五年七月にウィリアムは、クォーターリー・ジャーナル・オブ・メディカル・サイエンスという季刊誌の編集長に抜擢される。こうして、ウィリアムは出版業界へも知己を広めることになる。出版社を巻き込んだスペランツァの傍聴席でのあの勇敢な振る舞いは、それから4年後のことである。従って、スペランツァの名前とその勇敢な行動は、当然、ウィリアムの知るところとなる。さらに、二人の出会いに関しては、オドノバン (John O'Donovan) やストークス (Dr. William Stokes) の娘マーガレット (Margaret) などが、きっかけになったと考えられている。

しかし、二人が知り合う以前から、ウィリアムはスペランツァとは違う女性に恋をしていたといわれている。その女性は、名前をヘレン (Helen Faucit) といい、シェークスピア劇などに出演する女優で、演技もうまいと評判だった。息子のオスカー・ワイルドも女優に夢中になるが、それもこの父親の血を引いたのであろうか。ともかく、彼女の演技については、スペランツァ自身も雑誌「ネーション」のなかで、彼女の演技のうまさを絶賛する記事を書いている。ウィリアムの熱き思いにもかかわらず、ヘレンは一八五一年四月二五日にマーチン卿 (Sir Theodore Martin) と結婚する。その約半年後、ウィリアムはスペランツァと結婚することになる。その期間を長いとみるか短いとみるかは、人によって分かれるところであろう。いずれにせよ、噂としてはあるが、ウィリアムはスペランツァにヘレンの面影をみていたというものが流布していた。つまり、ウィリアムはヘレンに未練を残しつつ、ヘレンに似たスペランツァと結婚したというのだ。もちろん真実は知る由もないが、ここに、ヘレンのことについて書かれた記事がある。

ヘレンはすばらしい体軀をしていた。高い身長、また、ふつうの女性よりもずっと細くて長い手足をしていて、姿勢も良かった。また、身のこなしには、生まれついで品の良さがあつた。細い首に気品高くなつた頭。機敏に動く唇。並外れて優しく深みのある声。<sup>(5)</sup>・・・

こうしたヘレンの体型や氣質についての描写には、スペランツァに共通するものがあるのは事実である。しかし、だからといって、ウィリアムがスペランツァのなかにヘレンを求めたと断言することは短絡すぎる考え方であろう。ここでは、この結婚が打算によるものではなかつたことと、少なくとも、ウィリアムはスペランツァを単なる愛人ではなく、結婚相手としてまともに考え、それを実行したということは事実として認めなければならぬ。

二人が結婚した時点で、ウィリアムには、三人の私生児がいた。ヘンリーと二人の姉妹であり、その母親は、ダブリンのある店の経営者だつたということである。しかし、ウィリアムの結婚のために、その兄レイフが子供たちを結婚前に引き取つたとされる。その事実を事前にスペランツァが聞かされていたかどうかについては現在も謎のままである。ともかく、こうした様々な事情にも関わらず二人は、ハネムーンに出發した。

ハネムーン

二人が正式に結婚式を挙げたのが十一月であるのに二人のハネムーンは八月だつた。従つて、このハネムーンは正式な言い方をするとは婚前旅行と言うことになる。しかし、それは幸福な二人にとつてはさして重要なことではなかつた。二人はハネムーンの旅行先として、スカンジナビア半島を選んだ。此は、当時としては、珍しい選択だつた。

そこへ行くための交通の便がよくなかったからだ。しかし、それにもまして、二人の決意を促したものは、そこが先史時代の遺物の宝庫に他ならないからだ。

二人はダブリンを出発して、リバプールとハルを経由しハンブルク、キール、コペンハーゲンへと向かった。リバプールからの汽船には、ハルの商人、ワニ、六匹の猿、六人のドイツ人が乗っていた。最初の寄港地キールで、コペンハーゲン行きに乗り換えた。コペンハーゲンからさらに、クリスチャニアそれからストックホルムへと足を延ばした。そこで、二人は、当地の博物館や美術館などを数多く訪れた。スウェーデン滞在中、Baron Von Kroemnar のゲストとなり多くのパーティーに出席した。

そこから、ダブリンへ戻る途中にベルリンへも立ち寄った。ベルリンでは、「ドイツ人はビールとチーズを食べて生きているので、政治的にも危険な民族ではないし、そうなることは絶対あり得ない」と感想を述べている。二人は、そこで、ビールとチーズを堪能し、帰路へついた。これが、二人の楽しいハネムーンの始終である。

## 新婚生活

楽しいハネムーンが終わると、すぐに二人には現実の生活が待っているのが常であるが、二人にとってハネムーンはそこでは終わらなかった。なぜなら二人はそのハネムーン旅行の経験から、それぞれすばらしい成果を生んだからである。

まず、夫のウィリアムは、ハネムーン先のUppsala大学から、honoris causa degree という学位を得て、さらには、Polar Star という勲章まで授与されるのである。また、妻のスペランツァも、このハネムーンで訪れた景勝



を歌い、それを *The Glacier Land* という本にして出版するのである。

二人の新居は、イフリー川から、徒歩で数分のところにあるウエストランド街一五番地だった。しかし、患者が増えたことで、二人はさらに、徒歩で数分もかからない二一番地へ引越した。この引越しの原因として、まず、出産に伴い子供部屋の確保があったかもしれないし、さらに、ウィリアムの母親の住む十番地から、少し離れたことがあったかもしれない。いずれにせよ、引越しはそれに終わらずに、さらに、広くて閑静な住宅街のメリオン・スクエア一番地に引越すことになる。その部屋には、重厚なマホガニーでできたテーブルや椅子、当時流行の画家の手になる大きな油絵、さらにトルコ製の絨毯やラグなどがあったと伝えられている。まさに、高級住宅の内装であった。また、この住宅街は、その場所の格式から言っても、ウィリアム夫妻が、社会的に名声を勝ち得たことを意味しているといえよう。そのスクエアには、ダブリンを代表する建物があり、近所には、判事の家や弁護士の家が建ち並んでいたからだ。

二人は、その後三人の子供をもうけることになる。

注

- (一) Terence De Vere White, *The parents of Oscar Wilde* (Hodder and Stoughton, 1967), p.18.
- (二) Richard Ellmann, *Oscar Wilde* (Hamish Hamilton, 1987), p.10.
- (三) Horace Windham, *Speranza: A Biography of Lady Wilde* (T. V. Boardman & Company Limited, 1951), p.45.
- (四) Joy Melville, *Mother of Oscar* (Allison & Busby Limited, 1999), p.61.
- (五) Theodore Martin, *Helen Faucy* (Blackwood, 1900)